

潮時に顔を出す位置に南北に長く分布し、この石材群と海岸から約 25 m付近に位置するかもめ石までの間の海中にのみ確認できる。また、海岸とかもめ石との中間には重なった石材がある。一見すると海岸から重なった石材、かもめ石が船積みにおける一連の構造物ではないかとも考えられるが、詳細は不明である。ただし、かもめ石より海側は一段と深くなっていることも踏まえると、かもめ石をもやいとした船積みに関連する遺構の可能性もある。⁽²⁾

天狗岩丁場海岸部（磯丁場）の規模は、天狗岩丁場海岸部は南北 250 mの範囲に亘る。ところが、かもめ石付近の石材のまとまりは、南北 25 m、東西 30 mの範囲に限られ、一つの谷筋で搬出される石材の船積みは、石材の仮置きスペースを含め、この程度の規模であった可能性がある。一方、八人石丁場海岸部の規模は、南北 50 m、東西 40 mであり、規格石材は南北 25 m、東西 30 mに集まる。船積みに関係するような遺構はわかっていないが、海岸部の規模から推定すれば、2隻程度の船を着岸させることは可能であろう。

このように、小豆島石丁場跡（岩谷石切場）においては、露頭する花崗岩が海上から確認できる岩山があり、それに加え、船を着岸して仮置きした石材を容易に搬出可能な海岸がセットである地点を対象に採石を展開したと考えられる。

（1）渡辺武ほか「徳川期大坂城石垣築城時の岡山県牛窓町前島石切丁場遺跡調査」『土木史研究』17、1997。

（2）小豆島町『国指定史跡大坂城石垣石切丁場跡 天狗岩丁場 探訪マップ』を参考に作成。

本調査は小豆島町と同志社大学文化遺産情報科学研究所の共同プロジェクトとして平成 24 年 8 月から開始した調査の一部である。天狗岩磯丁場（かもめ石付近）の石材分布図〔PL7〕は、高田祐一、福家恭、広瀬侑紀、望月悠佑、有吉康徳が作成した。

2. 残置された石材および引き揚げの事例

大坂城再築に関する石材調達において、川岸・海岸に残置された石材や海・川揚がりの残石の事例がある。類例を整理する。

（1）川岸・海岸に残置された石材

①京都府木津川の事例

京都府木津川には、藤堂家が大坂城再築のために切り出した石材が残置されている。『元和九年拾月七日賀茂残り石之帳』と石材を分析した高橋美久二氏によれば、第一期普請の際に切り出し、元和 9 年に残石を調査し、記録化と石材へ日付・サイズの打刻が行われたとのことである。⁽¹⁾ 京都府木津川市山城町平尾の開橋の東岸南側、木津川市加茂町大野小字山際の赤田川合流点に石材が現存している。



開橋東岸南側の残石



赤田川内の残石

②兵庫県芦屋市呉川遺跡および宮川川底の残石

兵庫県芦屋市の呉川遺跡は、東六甲山系の旧海岸部にあたる。発掘調査では石材が十数石出土しており、船積み場の残置された石材と考えられている。⁽²⁾呉川遺跡に近い宮川の川底には、石材群が確認され、芦屋市遺跡地図（2001年）に記載されている。兵庫県阪神南県民局尼崎港管理事務所は、河川環境整備事業として護床整備事業を計画し、埋蔵文化財の照会が行われ、2008年に分布調査が行われている。⁽³⁾



呉川遺跡から出土した石材の展示



宮川川底の矢穴石

（2）海・川揚がりの残石

①兵庫県たつの市室津漁港で引き揚げられた角石

兵庫県たつの市御津町の室津漁港では、昭和47年の室津漁港修築工事に伴い、残石2石を引き揚げられている。⁽⁴⁾現在は、室津漁港の西端に置かれている。室津は古くから海上交通の要地で、潮待ちの港であった。江戸時代には、朝鮮通信使の寄港地となっていることや、本陣が6軒あり、多数の西日本大名が宿泊地としていた。ケンペル著の『日本誌』に室津が登場し、港内に多数の船が繫留している様子が描かれている。

引き揚げられた残石は、灯籠の端とよばれた船着き場近くの海底に沈んでいたものという。大坂城普請において室津周辺では石切場は確認されていないため、北九州あるいは瀬戸内海

島嶼部の石切場からの運送途中に潮待ちなどで室津に寄った際に、何らかの事故により海に落ちたものと推測される。中川家史料では元和6年(1620)「西国・四国衆、角石・大石など国々より大略登申候、勿論角石などハ悉舟ニ而上り申候」⁽⁵⁾という状況であった。大名は各地から角石を大坂へ運んでおり、相当数の角石が船で運ばれていたことがわかる。大坂城普請以外の公儀普請の目的材であった可能性もある。

石材は、全面に丁寧なノミ調整を施した角石である。石材①（写真左側石材）は長さ390cm・幅150cm・高さ144cm、石材②（写真右側石材）は長さ400cm・幅153cm・高さ143cmである。⁽⁶⁾矢穴の深さは約6cm（途中で割れているため浅くなっている）・矢口の長さは11cmである。



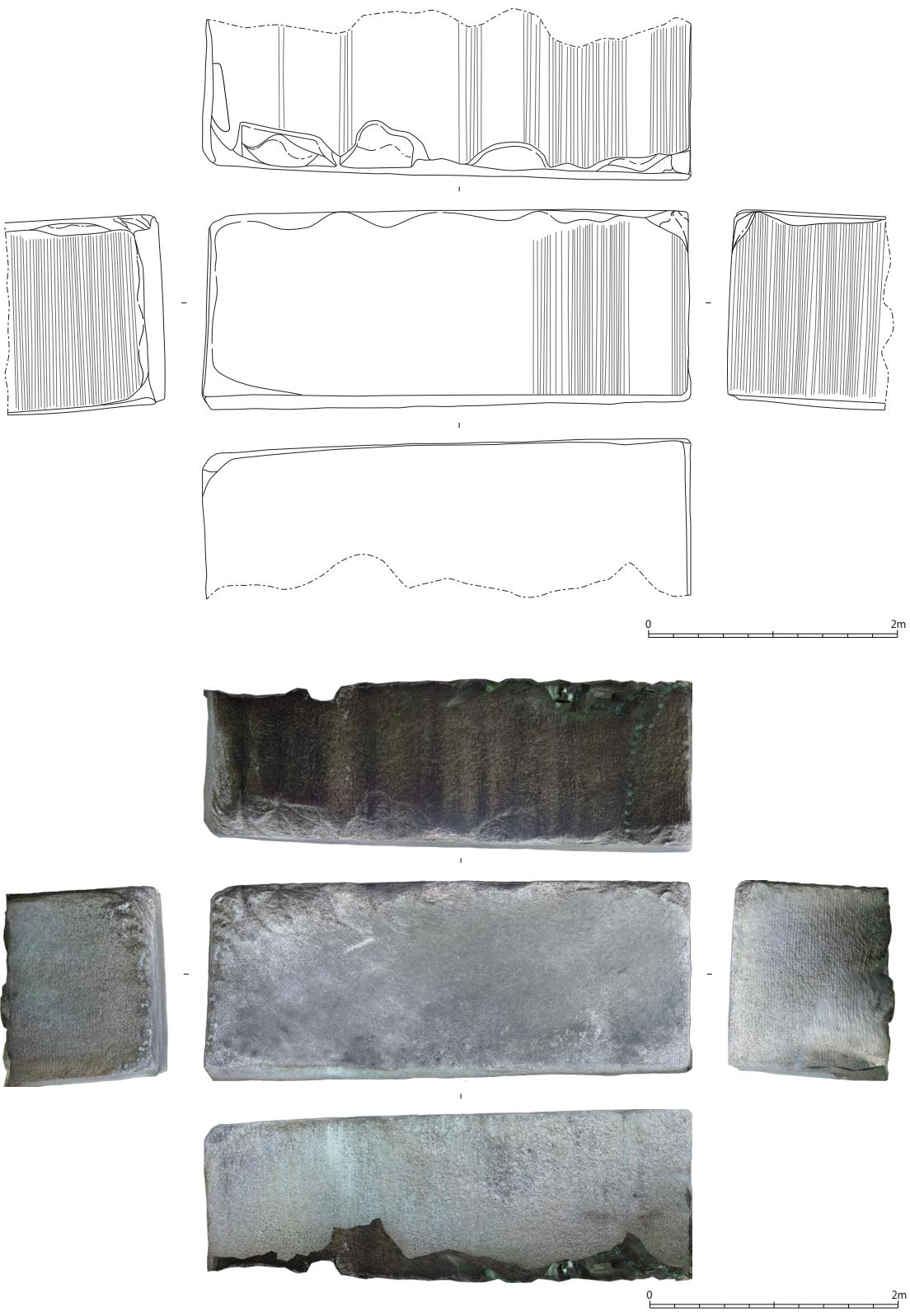
左上 室津漁港引き揚げの石材
(左から石材①、右から石材②)

左中央 石材①

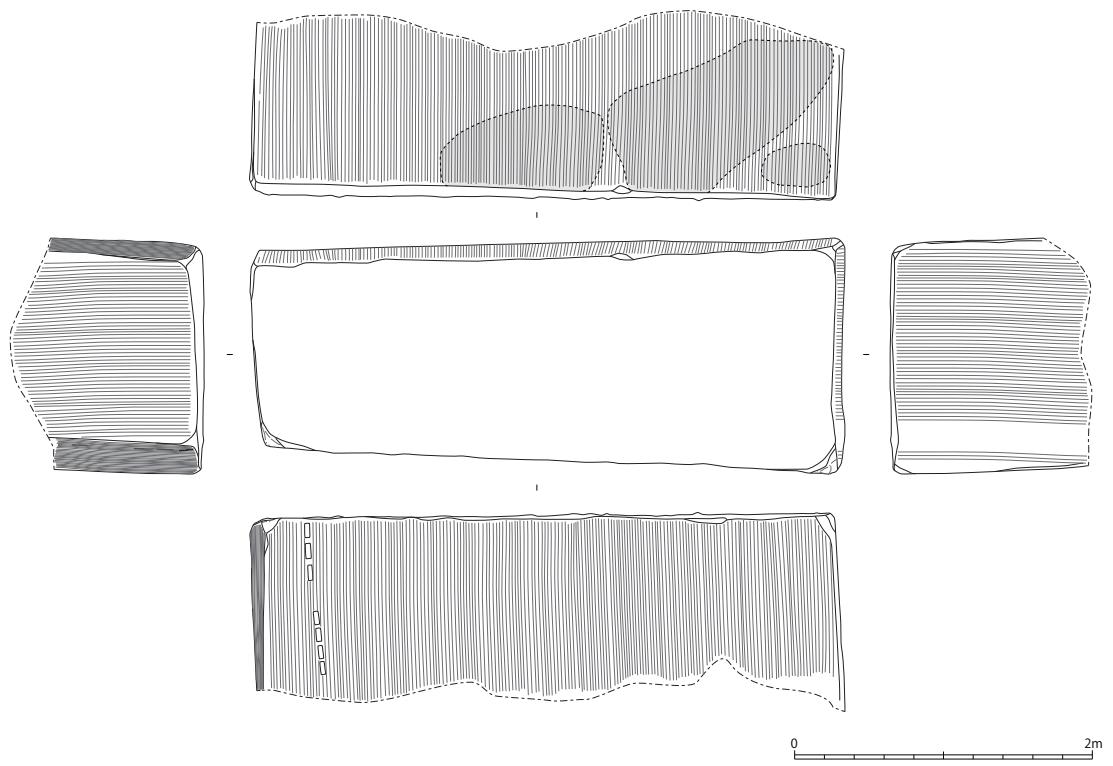
左下 石材②

右上 石材に付着したフジツボ

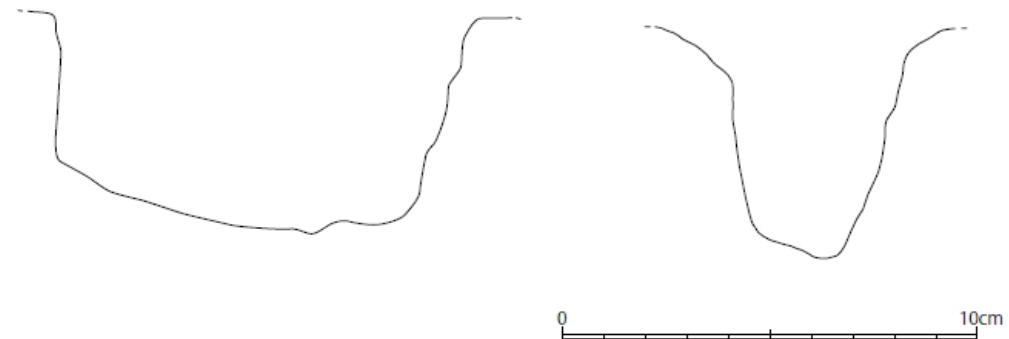
右中央 ノミ調整と矢穴



室津漁港の石材①



室津漁港の石材②



室津漁港石材②の矢穴（左が縦断面、右が横断面）

②大阪府大阪市伝法で引き揚げられた築石

正連寺川総合整備事業による河川工事の際に発見され引き揚げられた。現在は、大阪市此花区伝法にある伝法漁港の南東角に4石設置されている。江戸時代、伝法は廻船の拠点が置かれた。伝法を船籍地とした伝法船が大坂・江戸間の海運に従事した。⁽⁷⁾明治期には、新淀川が開削され、伝法川は新淀川に接続するかたちとなった。そして伝法川は現代に埋立が進み、伝法漁港に一部痕跡を残す程度である。大坂城普請において「舟手有之衆ハ多分海船ニテ、でんほう・福嶋あたり迄御取寄候て、それより河舟ニテ御城近所迄とりよせ被申体と見へ申候」という状況で、石材を積んだ船は伝法・福嶋に運び、川舟に積み替え大坂城近くまで運んだという。引き揚げられた4石とも花崗岩ではあるが、色味が異なる石材があり、異なる石材産地から集められた証左となろう。

③大阪市北区毛馬で引き揚げられた石材



石材を設置している伝法漁港



伝法漁港の石材

明治期以降に行われた淀川改修工事の際に引き揚げられたと推測される石材十数石が大阪市北区長江東の淀川河川公園に設置されている。大坂城普請の際、伏見城石垣の石垣石を転

用するため、伏見から大坂まで淀川を舟で運んだ際に、落ちた石材とされている。数石に刻印もある。

④安井道頓紀功碑・河村瑞賢紀功碑

大正4年、安井道頓・道トの贈位を記念して、大阪市中央区島之内日本橋北詰に紀功碑が建てられた。⁽⁹⁾ 石材は、大坂城普請のために運ばれたが、川に転落した石材を引き揚げて利用したとされる。長さが台座の上から373cmある。矢穴列が4列あり、多面的に割っている。碑文横の矢穴列は、矢穴掘りの途中で作業放棄されている。矢穴は、矢口の長さ約12cm、幅約5cmである。

同年、河村瑞賢の紀功碑が建てられた。大阪市西区川口4丁目あたりに所在する。安井道頓紀功碑と同じく川に転落した石材を使用したと伝わる。長さが台座の上から352cmある。矢コギ痕があり、表面の粗加工が施されている。



日本橋北詰の安井道頓安井道ト紀功碑

⑤大阪府高槻市の高槻城残石

昭和62年、高槻市前島浜で長さ約1.4m、推定重量1.3t、花崗岩石材が発見された。淀川の舟運によって運搬した場合、前島浜は高槻城への距離が最短となるうえ、ほぼ水平な道筋で陸送できるという。⁽¹⁰⁾ 石材は、淀川河川事務所と保存協議し、現在しろあと歴史館で展示されている。

- (1) 高橋美久二「木津川河川敷の大坂城残石」『山城郷土資料館報』8、1990。
- (2) 藤川祐作「六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地—芦屋市吳川町発見の新資料を中心に—」『歴史と神戸』168、1991。
- (3) 『徳川大坂城東六甲採石場—国庫補助事業による詳細分布調査報告書—』兵庫県教育委員会、2008。
- (4) 『播磨灘の考古学～室津と海に眠る宝もの～』室津海駅館特別展図録22、たつの市教育委員会、2016。
- (5) 99「中川家記事」N 200『岡城跡石垣等文献調査報告書』竹田市教育委員会。
- (6) 藤川祐作「室津港内から引き揚げられた角石2石 - 徳川大坂城採石場の研究1-」『わだち』8号、1974。
- (7) 「伝法船」『国史大辞典』。